

永田委員意見

「福島浜通り地域の国際教育研究拠点に関する有識者会議」論点整理（案）について

本有識者会議の目的として、本論点整理（案）では、第一に、

「1 国際教育研究拠点の目的・機能等」の（1）、

「①原子力災害に見舞われた福島浜通り地域を復興・創生（魅力ある浜通り地域の創出、定住人口（特に若い世代）の拡大等）すること」において、

「人口減少が著しく、帰還者数が限定的な浜通りにおいては、人口増に向けた抜本的な取組みが重要であり、定住人口の拡大、特に次世代を担う若者の定着・移住等に資する拠点とすべきではないか。」とまとめられている。

一方、本論点整理（案）では、集まる人材が、優れた研究者、若手研究者、大学院生などに焦点が絞られている（「3 研究者・学生等を浜通りに集めるための研究環境、生活環境等 ①研究者等を浜通りに集めるため、他にはない魅力ある研究環境をどのように考えるか」参照）が、これらの候補者については、所期の目的に照らして、いくつかの問題がある。

- （1）優れた研究室を仮に20程度立ち上げても、各研究室にはせいぜい10-20名が所属することになるのであろうから、総数で200-400名程度の規模となる。
- （2）若手研究者、大学院生などは、1つの研究室に長くとどまるものではなく、promotionを受けて、世界中に飛び出していくものである。従って、上記の数字は、年が経てば増えるものではなく、定常状態になった時の規模である。
- （3）さらに規模を大きくしようとするれば、比例して優れた研究室を相当の数、揃えなければならない。

この規模では所期の目的を達成できないと考えるのであれば、やはり相当数の人材が働ける新たな科学技術を基盤とした産業を起こすことが重要となる。あるいは、研究室といった単位ではないかたちで、流動的であっても若者を一定期間取り込める仕組みを考える必要がある。

例えば、J ビレッジ（おおよそ年間あたり30万人以上が利用）などを活用し、これを利用する団体（日本代表、様々な大学団体、海外の団体など）を活用した、また新たな科学技術に根ざしたスポーツ科学、スポーツ医学、健康医学などを展開することなどが考えられる。例えば、J ビレッジでしか治せない臨床的なイノベーションやトレーニング方法の開拓など、医療ツーリズムへの接続なども考えられる。スポーツ科学、スポーツ医学、健康医学などの関連研究者、医学研究者、臨床医などは、利用者数＝サンプル数を考えれば、相当数が定着するものと考えられる。病院の併設も考

えれば、radiation medicine や放射能環境医学なども展開が可能となるであろう。

同様に、スマート農業の拠点形成も、相当数の人材を定着させる方策と考えられる。研究者（かなりの分野が必要。最先端生命学者、最先端技術者、食品科学研究者、環境科学研究者、ロボット工学者、農業経済学者、経営学者など）、農業従事者、農業関連のビジネスパーソンなどが集う拠点は、新たな食品作物の開発のみならず我が国の農業の将来像を設計し、地場産業である農業の先端化に資すると考えられる。

これらの意見は、もちろん、廃炉研究、アイソトープ動態・環境研究などを排除する趣旨ではなく、本論点整理（案）で第一に述べられている所期の目的達成に資する意見として申し上げるものである。

3 研究者・学生等を浜通りに集めるための研究環境、生活環境等

① 研究者等を浜通りに集めるため、他にはない魅力ある研究環境をどのように考えるか

- 継続的な研究費(例えば10年)や一線級の研究設備に加え、任期、給与等に関し、他にはない待遇が必要ではないか。特に若手研究者にとって魅力を高める必要があるのではないかと(任期10年等)。
- 研究成果が国内外に広く認知され、業績として高く評価される等、研究者の将来の礎となる拠点としていく必要があるのではないかと。
- 大学院生等にとっては、優れた指導者のもと、優れたチームの中で研究できること自体が魅力となるのではないかと。この地で単位が取得できる仕組み作りが重要ではないかと。
- 大学院生等や若手研究者が引き続き浜通り等で雇用される仕組みが魅力ある環境であり、浜通りの復興にとって必要ではないかと。

(追加)

- 女性の参画により、知財の経済的価値が向上するため、廃炉や復興において女性の力を活かすことを意識して取り組むことが必要ではないかと。

② 研究者等を浜通りに集めるため、他にはない魅力ある生活環境等をどのように考えるか

- 浜通り地域の復興の現状を踏まえると、夫婦がそれぞれ働ける環境(保育所等)を整えることが重要ではないかと。例えば、若手研究者が家族と生活して子育てをでき、女性が研究教育活動に積極的に加わるような新しい「研究所タウン」を構想することが重要ではないかと。
- 最新技術を体験可能な「モデルタウン」、例えば、無通勤で働ける、遠隔診断・遠隔輸送、自動運転など最先端技術に毎日の生活の中で触れることができるなどの生活環境は、研究者を集める魅力となるのではないかと。